

第 63 回日本チベット学会大会

ワークショップ「今、チベットから何を学ぶか」

11 月 14 日 [土] 四天王寺大学 (羽曳野キャンパス)

## 現代チベット学と代替民族誌の問題

大川謙作 (日本大学文理学部)

報告者は文化人類学の出身であるが、これまでチベット近世社会史・チベット現代文学・中国民族政策などの多様な分野で業績を発表してきた。報告においてはこうした自らの研究をまず紹介し、ついで特に文化人類学的チベット研究の歴史を「代替民族誌」という独自の観点から整理することで、現代チベット学 (Modern Tibetan Studies) という研究領域が持つ独特のダイナミズムについて考えた。こうした考察を通じて、「チベット学会」という多様な分野の研究者が集う学会というものの持つ存在意義について改めて確認することが本報告の目的であった。以下、簡単に報告についてまとめる。

日本チベット学会 (旧・日本西藏学会) は長い歴史を持つ学会であるが、そこに集う研究者は常に多様であった。伝統的にはチベット語文献を用いる仏教研究者あるいはチベット史研究者など、文献学的研究を主体としてきた学会ではあるが、とりわけ近年はフィールド言語学や文化人類学や文学など、およそチベットに関係することであるならばどのような問題でも議論し報告することのできる間口の広い学会となっている。こうした傾向は、もちろん一面では学会としての共通の問題意識の拡散ということにつながりかねない危険性はあるとはいえ、おおむね歓迎すべきことであると考えられる。

報告者がかつて専攻していた文化人類学は、その定義は困難であるとはいえ、フィールドワークをその学問的アイデンティティとする学問であるといえる。その意味において、統計を用いてしまえばその研究が統計学的研究と呼ばれるのと同じく、文化人類学はその研究対象 (何を研究するか) だけではなくその研究手法 (どうやって研究するか) によって定義される性質のある、方法の学問という側面を持つといえるだろう。

もしそうだとすると、文化人類学的チベット研究は大きな問題を抱えることになる。それは現代チベットにおいてはフィールドワークが困難であるという大きな問題と関連する。とりわけ外国人がチベット自治区で現地調査を行うことには長らく大きな困難が存在した。現地調査を禁じられたフィールド科学というこの問題状況に対して、チベット研究を志した人類学者たちはどのように対処したのか。それは、調査可能なチベット外の地域に赴き、

その地での調査をもとにチベット研究を推進するという方法であった。筆者はこれを代替民族誌と名付けた。例えば 1950 年代に外国人に開かれたネパール・ヒマラヤの南麓のチベット系住民の調査から「鳥葬の国」を書いた川喜田二郎の研究などはこの典型例であろう。しかしチベットの場合、代替フィールドはこうしたヒマラヤのチベット系民族居住地に限定されなかった。それは 1959 年のチベット動乱以降、大量のチベット難民が発生し、インドなどの近隣国に亡命チベット人社会を形成したことと関係している。チベットに赴くことができなくとも、インドなどの難民社会を尋ね、彼らをインフォーマントとした調査を行うことが可能になったからだ。この第二の代替フィールドでの調査はさらに二つの方向性に分かれる。一つ目は難民たちの状況をまさに難民状況として捉える調べるチベット難民研究である。ここまでは比較的シンプルな話であるが、チベットの代替民族誌的研究はここでもう一段特異な展開を遂げる。それは亡命チベット人社会での聞き書きをもとに、難民になる前の彼ら彼女らの故地すなわちチベット本土における社会文化的状況を再構成しようとする再構成民族誌あるいは遠隔地民族誌の試みである。それは当初は調査に入ることのできない「今の」同時代チベットの民族誌的研究の試みとして始まったはずであった。しかしチベットとりわけ中央チベットでは 1959 年のチベット動乱がきっかけとなって新中国の「民主改革」が急速に展開し、難民たちが知る「同時代チベット」であるはずの「ダライ・ラマ政権下のチベット社会」が「過去のチベット」へと変容してしまった。結果として、人類学者が *ethnography* として再構成したデータがそのまま *historiography* へと変容してしまっていた。これはデータそのものが変容したのではなく、データを取りまく環境が変化したためである。ここに 20 世紀のチベット現代史を歴史学者ではなく人類学者がリードすることになった理由がある。加えて、新中国が 20 世紀前半の歴史資料となる行政文書の使用を厳しく制限していたために、この時代のチベット史は「無文字社会の歴史」とも類似するような状況となっていた

この変化は研究者の側でどうすることもできない性質のことであってみれば、理論的に考察したり意味づけたりすることができない性質のものである。フィールド科学あるいは文献学としてのディシプリンに忠実な研究者にとってみれば、20 世紀前半のチベット史は「研究する術がない」ということで研究不可能な主題ということになってしまう。しかし人類学者たちの代替民族誌的試みは、

そのように「よく訓練された研究者」からすると打つ手がないように見えたこの時代についての情報を収集し、貴重な 20 世紀前半のチベット社会史の資料となるデータを大量に残すことに成功していた。このようなレスキューが可能となった背景には、チベット学 (*Tibetan Studies*) というディシプリンにとらわれない受け皿が存在したことの背景が大きい。ここにチベット学という、「地域名プラス学会」という構造の名称を持ち、多様なデ

イシプリンの雑居を許す学問分野を設定し、学会活動を行うということのひとつの意義と可能性がある。チベットとりわけその近現代史は政治的にもきわめて大きな制限のある研究領域であり、こうしたチベットという対象そのものが持っている性質にあわせた研究態度が必要とされていると考える。そしてチベット学という枠組みはこうした研究態度を許容する一種の受け皿としての機能を果たしてきたのであり、そこにこの枠組みのポジティブな側面を見ることができると考える。